ワークショップ報告：「子どもの放課後を考える」を終えて

広大マスターズ会員　原田　彰

広島大学マスターズ主催・東広島市教育委員会共催の「ワークショップ・子どもの放課後を考える」は、平成 21 年 2 月 28 日、関係者及び一般市民 112 人が参加し、第 1 部「放課後子ども教室」の実践報告、第 2 部「パネル・ディスカッション」という 2 部構成で開催された。

「放課後子ども教室」（文部省補助事業）は、平成 19 年度は東広島市内 9 教室、20 年度は 15 教室で実施され、21 年度は 20 教室、さらに全小学校区（37 教室）に拡充される予定である。今回は、志和堀小・河内小・三つ城小という 3 つの小学校区の「放課後子ども教室」の推進者による実践報告があった。この報告を踏まえて、「パネル・ディスカッション」では、「教室」推進者、小学校長、青少年育成行政、保護者などの立場から各パネラーの発言があり、また広島大学マスターズからは子どもの自然体験活動の指導者である西村清己氏が議論に加わった。

以下、実践報告とディスカッションの中から、「放課後子ども教室」のあり方を考えていくうえで参考になると思われる意見を要約した。

１．実践報告は、「教室」の実施内容や形態が地域ごとに異なり、地域の特色が出る「教室」の推進が求められていることを印象づけた。

２．「教室」の推進には地域ボランティアの協力が不可欠であるが、学習アドバイザーに人材がもっと欲しいというパネラーの訴えがあった。

３．「教室」の存在意義はどこにあるのかを徹底して考え、「教室」がなぜ必要なのか、実践を通してその理由を見つけ出すことができた、と語る推進者の発言があった。何のための「教室」なのかに関しては、パネラーから力強い意見が出された。「教室」は単に子守りをする場ではない。何か適当にメニューをそろえればよい場でもない。やらないといけないことは何なのか、しっかりしたものを持たねばならない。

子どもが行う活動については、こういうことを身につけさせたいというねらいを持つことが大事である。このような発言があった。

４．「教室」が実施されるようになって、小学校で見る子どもたちの姿に変化が生まれた、という発言があった。「放課後子ども教室」は、子どもたちに必要な「３間」（時間、空間、仲間）を取り戻す機会になっている、という。

５．青少年健全育成の視点から見ると、この「教室」によって、地域の人々とのふれあいが生まれるとか、ルールを身につけることによって規範意識を高めていく、

といった効果が期待される、という意見があった。

６．「教室」では、活動の場としては、ただ自由に体を動かしていればよいのではなく､子どもが気づかないでいることを気づかせてやることが重要であり､他方、学習の場としては、学校の学習の基礎になることを身につけさせることも必要である、という意見が出た。

７．「教室」のコーディネーターの視点から、「①継続すること、②「教室」を支える人を確保すること、③「教室」の仕事は、同じ子どもを相手にしても公民館活動とは異なること」の大事さが指摘された。また自然体験活動の視点から、子どもの活動に「①感性を育てる、②好奇心を育てる、③人間関係づくり、④体力づくり」といったねらいをしっかり持たせることの大事さを強調する意見が出た。

８．「大人に楽しいことが子どもにも楽しいとは限らない」、「ただ楽しいだけでなく、やりとげる楽しさを」といった発言が印象に残った。

意見のすべてを網羅できないのは残念だが、ここには、今後の実践を通じて深めていくべき課題が示唆されているように思われる。ご協力をいただいた関係者の方々に感謝の意を表するとともに、「放課後子ども教室」のさらなる発展を祈りたい。